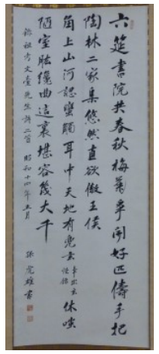
長善館 友の會報

平成31年3月31日
第2号

長善館史料館収蔵資料
解説学習会

長善館友の会では、年間行事計画の一環として、二月十七日㈰に収蔵資料の解説学習会を開催しました。十七名の参加があり、内容は初代館主鈴木文台の詩文二篇を取り上げ、解説を加えながら参加者全員で鑑賞しました。



——読み——

六筵書院　春秋を共にす
梅菊争い開きて好匹儔たり
手に陶林二家の集を把り
悠然として直王侯に傲らんと欲す
角上の山河に蠻觸を認む
耳中の天地に兜玄有り

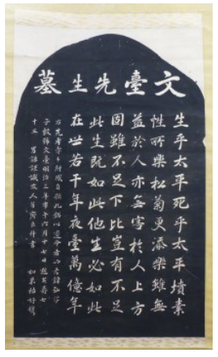
嗤うを休めよ陋室肱纔かに曲ぐと
這裏幾大千を容るるに堪ゆるなり
祖考文臺先生の詩二首を録す
昭和十四年五月　孫虎雄書

〈訳〉

私は、六筵書院で自然の移り変わりにしたがって過ごしています。春には梅、秋には菊の花が美しく咲いて甲乙つけがたいものがあります。そして、陶淵明と林和靖二人の詩人の詩集を手にして、ゆったりとした気分で、ひたすら王侯貴族よりも気ままに楽しもうと思います。

六筵書院は、蝸牛の触角の上にある狭い蛮氏や触氏の国や、耳中の天地のように非常に狭苦しい部屋ではあるが、兜玄国のような広く奥の深いすばらしい世界があります。嘲笑しないでください、むさ苦しい狭い部屋で肱がやっと曲げることができる部屋だということを。この中（六筵書院の間）は、広大無辺の世界を入れるのに十分な部屋なのです。

祖父の文臺先生の詩二首を書きしるす
昭和十四年五月　孫虎雄書



——読み——

文台先生墓

太平に生まれ太平に死す　墳の素性の楽しむところは松菊さらに楽を添う　人に益することなしと雖も亦人に害すること無し　上に比ぶれば固足らずと雖も下に比ぶれば豈足らざること有らんや　此の生既に此の如し　他の生必ず此の如くならん　世にあること若干年夜臺は萬億年なり
右は先考嘗て感ずる所ありて自ら此の銘を撰し以って遺命せし者なり
考の諱は弘宇は子毅文臺と号す
明治三年庚午六月十七日逝けり
七十五を寿ぎ男謙謹みて識す　友人の芳斎拝書す　如来祐好鐫つ

〈訳〉

文台先生墓

私は、太平な世の中に生まれ、はなはだ平凡に死にます。私の生来の楽しみは、松や菊を鑑賞することであり、さらに、つけ加えて音楽も楽しみます。これは他の人に利益を与えるというものではないが、人に害を与えるということもありません。上流階層の人に比べればもともと足りないが、下層階級の人に比べれば不足など決してありません。私の一生がこのようなものでしたから、あの世の一生も必ずそうでしょう。この世に生きているのは少しの年月ではあるが、あの世の世界は何万年何億年の世界なのです。

右は、亡くなった父が、思うところがあっ

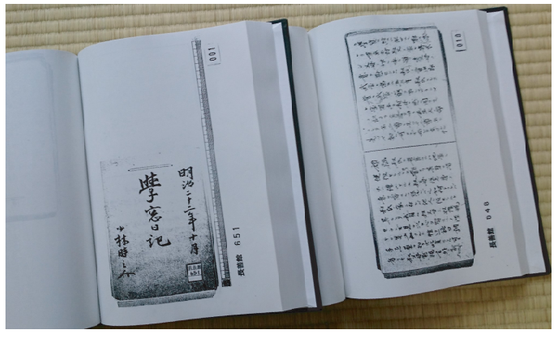
長善館史料館展示紹介

鈴木虎雄博士が1878（明治11）年に生まれて、今年は生誕141年目です。

文化勲章を受章した鈴木虎雄博士の遺墨や遺品などを展示し、皆様の来館をお待ちしております。また、定期的に企画展示も行っておりますので、ぜひご覧下さい。

長善館歴代館主の日記が閲覧可能に

新潟県立文書館に保存されている、長善館歴代館主の日記（複製）が長善館史料館で閲覧が可能です。これは、燕市が筑波大学中野目徹教授に委託している「歴代館主日記解読業務」（4年間継続）事業により実現したものです。閲覧ご希望の方は、長善館史料館事務室に気軽にお声かけください。



長善館友の会 新年度会員募集

「長善館友の会」の入会会費は、単年度ごととなっています。

現会員の皆様方からは、引き続き入会いただきますようお願いいたします。個人会員は５００円・事業所会員は１、０００円です。

大勢の方の入会をお待ちしています。

入会手続きは、長善館友の会事務局まで。

※6月1日（土）に友の会の総会を予定しています。

当日は、新潟県漢詩連盟会長の佐藤海山先生をお迎えし、講演を予定しています。（演題「鈴木虎雄博士に親しむ　―家族に与えた漢詩から―」）

大勢の皆様方の聴講をお願いいたします。

●一般印刷 ●名刺・ハガキ・封筒 ●書籍・刊行物
●ステッカー ●のぼり ●看板 ●カッティングシート
真滝プリント
SHINTAKI
〒959-0242 新潟県燕市吉田大保町 2-13
TEL. 0256-92-7820
FAX. 0256-87-1753
E-mail: info@shintaki.net

編集後記

長善館友の会会報第二号をお届けします。

今年度、研修事業の一環として「収蔵資料解説学習会」と「視察研修会」を実施しました。

今号ではその内容と参加者の声を掲載しましたので、ご覧いただき、今後の長善館友の会の活動の参考にしていただければ幸いです。

六月一日㈯には、三十一年度の総会及び講演会を予定しています。会員の皆様の参加をお待ちしています。

発　行　長善館友の会
事務局　燕市長善館史料館内
〒九五九―〇二二七
新潟県燕市粟生津九七番地
電話　〇二五六―九三―五四〇〇

て自分でこの銘文を書き、死に際して残した命令で墓石に彫りました。父の諱は弘、字は子毅、文臺と号しました。明治三年庚午六月十七日に逝去しました。七十五歳でした。息子の楊軒が謹んで清書し、それを（冨取）芳斎が書き、如来祐好が墓石に彫りました。

◎参加者の声

松田節子

二月十七日に開かれた「長善館収蔵資料解説学習会」に参加いたしました。

横山館長は「文台先生はどういうお人柄であったのか」と前置きされ、初代館主文台先生の詩二首を孫の虎雄先生が書かれた作品と、晩年の文台先生が七十年の人生を振り返って詠んだ詩を冨取芳斎が書かれた作品を解説されました。

「もともとの私の性格は、松や菊を楽しみ、その上に音楽（詩吟）を楽しむ。これは、人に利益を与える事もないけれど、人に害する事もない。上流社会の人に比べればどうして足りない事などあろうか」と。儒家、道家、仏教に通じた思想をお持ちだったとの事でした。

収蔵資料をこの様に解説していただけると、初心者の私でも情景が浮かんで来る様で、史料館を更に身近に感ずる事ができ、とても良い企画だと思いました。晩年の虎雄先生は何度もここ長善館に足を運んで下さったと、館長はお話されました。

私が、亡き父の写真集を作るときにネガを探すと、虎雄先生が帰郷された時の写真が沢山あった事を思い出しました。当時小学生だった私も、虎雄先生にお目にかかる機会があった事は名誉な事と思っております。

今後も、収蔵資料解説学習会に参加して、長善館の事を学んで参りたいと思います。

良寛様に魅せられ教えられて

～みんなにこやかいい気分～

近嵐久栄

東の山々が、陽の光で輝く三月十七日朝、「長善館友の会」視察研修会員は粟生津公民館から良寛様生誕の地・出雲崎へ出発です。

車中で「友の会」会長・星野様より文台先生が幼少の頃、良寛様から学んだ等の縁によりこの企画をした趣旨を教えて頂きました。

午前中は良寛様の生まれ育った出雲崎を視察。そして昼食は「和らぎ家」で舌鼓。

午後は、良寛と貞心尼との出会いの地であり、遷化の地、わしま・島崎を視察しました。

私は、出雲崎とわしまの視察で感じた事を一つずつ取り上げて感想を書いてみました。新潟風景百選第一位の丘の下、手入れの行き届いた庭を通って行くと素敵な建物が待っています。これが良寛記念館です。中に入ると良寛関係の掛け軸や書が多く拝見できます。私が特に眼に引いたのは良寛様の関係書が溢れている本棚です。これでも世に出ている本の半分にも満たないとか。この著書を見ながら良寛様を知るには高山の道と同様、人それぞれの道があるのではないか。良寛様は、宗教家、歌人、書家であると同時に酒や人を愛する旅人でもある。従って自分は自分なりに良寛様に接することが大事ではないか。書が読めなくても悲観しなくていい。気軽にお酒やお茶をたしなみ、誰とも吉田弁で明るく語り合えることが良寛様へ近づく一番の早道ではないかと思い直しました。

良寛様の墓地の有る隆泉寺前の「はちすば通り」を歩きながら、ふと晩年の

良寛様が狭い砂利道を貞心尼に手を引かれ散策しているお姿が浮かびました。八十の坂を超えた私もいつか妻と互いにいたわりながら良寛の足跡をたどってみたいなと思って帰ってきました。

よく見、よく会話し充実した一日でした。

この視察で労を重ねた横山館長様や事務局の方、また温かく迎えてくれた出雲崎、わしまの方々へ感謝の意を捧げます。

良寛の書付け

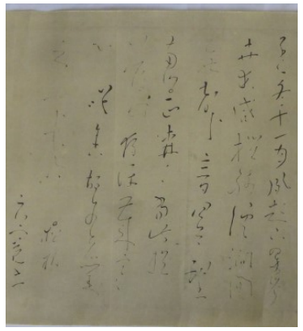
解良亮一

鈴木文臺の兄、鈴木隆造（桐軒）は医師であるが詩文にも長けた人で良寛とも非常に親しい間柄の人でした。

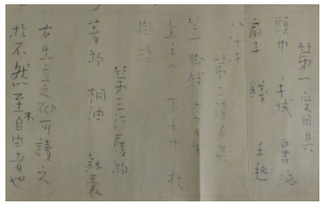
良寛が粟生津方面に托鉢に来ると必ず鈴木家を訪ねていました。

ある時、鈴木家で良寛が昼寝をしていた時、桐軒が良寛の持ち歩いていた頭陀袋の中に何が入っているのかと興味を持ち、良寛が寝ている間にそっと頭陀袋を開いて見たところ、いろんな物と一緒に一枚の書付けがありました。目を通してみると面白い内容だったので抜き取り失敬し、大切にしまっておきました。

牧ケ花の解良榮重が「良寛禅師奇話」に「今其書付ハ某ノ家ニアリ」と書いています。その某の家とは鈴木隆造の家のことです。同家には良寛の遺墨などを「青山白雲西又東　縦有經過客　消息応難通



青山前與後



良寛がこの書付けを持つことになったのは、托鉢に出かける時、身につけたり持参すべき用具等、人の家に行ってよく忘れてくることがあったためです。これには良寛も我がことながら閉口していました。そこである人から「持参するに必要な品物はちゃんと紙に書いて、家を出るとき一遍読み上げ、忘れ物はないか確かめるようにしたらどうか」と教えられ、良寛も「それはとてもいい方法だ」と言って、自分で必要の品を書いた備忘用の紙切れをつくり、出かける前や、人の家を辞する時に、必ず読み上げることにしていたと言われています。その書付けを隆造が抜き取ったものです。

其随身ノ具人ノ家ニ至ルゴトニ多ク忘レテ遺スコアリ人教テ其品々ヲ書記シ出立ントスル前讀ㇾ一反セヨト云フ師宣也トシテ自ラ其品ヲ書記シテ必讀今其書付某ノ家ニアリ『良寛禅師奇話』より

○老いの身のあはれをたれに
　語らまし杖を忘れて
　帰る夕暮れ

帖」という巻物（約６ｍ）にまとめ、大切に保管しています。現在その写しは「長善館」に所蔵されています。

隆造が抜き取った書付けに書かれているのは次の内容です。

第一　受用具
頭巾　手拭　鼻紙　扇子
銭　手毬　ハヂキ

第二　随身具
笠　脚絆　カフカケ
上手巾　下手巾　杖　掛絡

第三　行履物
著物　桐油　鉢　嚢

右出立砌可レ読レ之於不レ然至二不自由一者也

みぎしゅったつのみぎりこれをよむべししからざるはふじゆういたるものなり